GUNMA PREFECTURAL LIBRARY
群馬県立図書館
新収蔵資料抄
Vol. 18
2022/ 6/24 発行
不定期刊

最寄り図書館に取り寄せ可

白から黄色へ　ヨーロッパ人の人種思想から見た「日本人」の発見

ロテム・コーネル／著　滝川 義人／訳　明石書店　2022.1　774p　22cm
230.5/ ネ 21　2022.4.22 受入　定価 7,000 円＋税

（目次情報は裏面参照）

資料概要

本書は、ハイファ大学（イスラエル）で教鞭を執るロテム・コーネルが著した人種思想史の大著で、全５巻シリーズの嚆矢となる一冊。「1300 年から 1735 年までの間にヨーロッパ人が日本人について書いたものを全部読破したように思われる」とこの分野の研究者から指摘されるとおり、800 頁近い本書の 342 頁は参考文献と注に充てられている。様々な国と言語の資料を網羅した参考文献リストから、本書誕生までの著者の資料渉猟のほどが分かる。

人種という概念は欧州人が創作したものだが、特に、最初に遭遇したころに「白」とされていた日本人や中国人が黄色人種とされるに至る欧州人の日本人に対するイメージの変容が本書のテーマである。

人種思想、人種主義の議論は 18 世紀に隆盛を極めるが、本書が扱う 1300 年から 1735 年という時代区分は、マルコ・ポーロの『東方見聞録』で欧州人に「ジパング」が知られるようになってから、分類学の父、カール・フォン・リンネ（父）が、『自然の体系』を上梓するまでの期間にあたる。著者は、この 435 年間の欧州人の日本人観を３つに分け、それぞれの局面を「推測」「観察」「再検討」と名付けている。

「推測の局面（1300-1543 年）」は、日本人の人種上の初歩的話題性が先立って欧州人にもたらされた時期とする。ポルトガル人はマラッカ等で色白のアジア人と出会うこともあっただろうが、関心をいだくことはなかった。マルコ・ポーロは日本人を色白と書いたがそれは伝聞に過ぎず、人種に関する認識もヒエラルキーの位置づけもなかった。

「観察の局面（1543-1640 年）」は、イベリア半島の交易商やイエズス会士が日本列島で日本人と接触した時期で、この頃には人種ヒエラルキーの萌芽があった。日本人は軍事力や技術力、精緻な社会システムや洗練された行儀作法から、中国人と並んで高い評価を受けておりアジアの他の国より高位のイメージ（＝白）があったことが明らかにされる。

「再検討の局面（1640-1735 年）」は、日本が鎖国しキリスト教の布教を強引に終わらせたことに始まる。日本に関する情報はオランダ東インド会社（VOC）を通じてしかもたらされない中、欧州では多岐にわたる科学的社会的発展があった。貿易に資する有用植物を求める経済活動は、植物学、植物分類学発展の要因ともなり、植物分類のパラダイムは人種観に結びつく。生物学や医学の進歩・体系化も人体器官を観察する視点を補強した。

この植物学、医学を修めた観察者にドイツ人植物学者で商館付き医師だったエンゲルベルト・ケンペル（1651-1716）がいる。彼は『日本誌』で、日本人は「黄褐色である」と言及する。没後発行されたこの本は、日本に関する情報量がそれまでで最も多く恐らく広く読まれた。「明るい」としながら日本人の肌を白と表現することを控えた商館長フランソワ・カロン、「他のインド人よりも色が白いが、ヨーロッパの住民より黄ばんでいる」とする編集者アルノルドゥス・モンタヌスの記述など、博物学や啓蒙主義の隆盛は印刷技術の発展とあいまって日本と日本人に関する様々な論評を産んだ。

17 世紀中旬には黄色は民族上の指定色として使われ始めたが、リンネが『自然の体系』を発表した時点では、色は依然、人種的特質と結びつけられていたわけでなく、日本人は色白で力があり尊敬に足りる文明人と考えられていた。その後２世紀をかけてネガティブな含意がついていく。

これまでの研究では、人種と人種主義の起源を大西洋の奴隷取引と欧州の反ユダヤ的態度に求めることが多かった。本書はそれに加え、さらに広域に住む多種多様な集団との出会いの結果として形成されたことを示唆している。

著者紹介

ロテム・コーネル（Rotem　Kowner）　1960 年７月、イスラエルのミフモレット生まれ。ハイファ大学アジア学科正教授。早稲田大学、大阪大学、ジュネーブ大学、ミュンヘン大学客員教授。専門は日本近代史。ヘブライ大学で東アジア学と心理学を専攻。ベルリン自由大学、筑波大学での研究の後、博士号を取得。さらにスタンフォード大学とヘブライ大学で研究を続ける。2010 年以降は、近世アジア、特に日本における人種と人種主義の研究調査を行っている。

本紙は、県立図書館が新たに所蔵した資料（図書資料・視聴覚資料）から、ぜひご利用いただきたいものを厳選してご紹介するものです。これらの資料は、禁帯出資料を除き、最寄りの図書館に取り寄せできます。
なお、本紙の内容は Web にも掲載しています。ご覧の際は右の QR コードをご利用ください。
また、内容の誤り等、お気づきの点があればお知らせくださるようお願いいたします。

群馬県立図書館　〒371-0017 前橋市日吉町一丁目９－１　電話：027-231-3008

目 次

日本の読者へのメッセージ
謝辞
著者の言葉

序
人種と人種論議―基本定義
啓蒙時代以前の人種―論議とその要素そして展開
ステージⅠ―最初の出会い
ステージⅡ―地域の情報
ステージⅢ―長期の出会いと地域情報の拡大
ステージⅣ―グローバルな情報と集大成
集団の地位に関する近世の決定要素

本書の目標

第一局面　推測段階―出会い以前の日本に関する知識（1300 年－1543 年）

第 1 章　ジパングの浮上とその先駆的民族誌
肌の色の中世的意義とポーロの見解

第 2 章　大航海時代の幕開けと“ジパング”
カリブ海のジパング―コロンブスの妄想
マラッカに来る謎のゴーレス
総括―推測段階における“人種”

第二局面　観察―初期の出会いと論議の始まり（1543－1640 年）

第 3 章　日本人に関する初期の観察
動き始めた論議―近世初期日本に関する人種知識の生産者たち
日本人とは何者か―初期の特徴描写
日本人の身体検査とその全体像
日本人の起源と民族的類縁性―予備的推論

第 4 章　当代のヒエラルキーにおける日本人の位置
尺度としての力
測定基準としての技術及び文化の達成度
包括的民族階層化の登場
アコスタの階層論
ヴァリニャーノの階層論
リンスホーテンの階層論
集団の属性論

第 5 章　新人類秩序の鏡像
政治的軍事的ヒエラルキー―奴隷と傭兵
社会的文化的ヒエラルキー―先住民との性交渉と結婚
精神の階層―イエズス会の会士資格
力とヒエラルキー―日本人対中国人

第 6 章　観察局面期の“人種”とその認識上の限界
近世の観察者に見る認識上の限界
可視域を無視し不可視域を見る
総括―観察段階の“人種”

第三局面　再検討―議論の到達点（1640 年－1735 年）

第 7 章　日本人の体型と起源に関するオランダの再評価
身体への転換―初期の徴候
日本人の起源に関する再検討

第 8 章　力、地位そして世界秩序における日本人の位置
オランダの力とアジアにおけるその限界
日本人の力とオランダに対するその影響
世界及びアジアのヒエラルキーと日本の位置

第 9 章　新しい分類学を求めて―植物、医術そして日本人
植物学、医学そして科学的思考の高まり
包括的人間分類法の誕生と日本人
人種マーカーとしての黄色い肌の登場

第 10 章　“人種”と「再検討段階」における認識上の限界
視覚的想像の限界
当代ペテン師の教訓
要約―「再検討段階」における“人種”

むすび―近世ヨーロッパにおける人種論議と日本人のケース
近世人種論議のメカニズム
近世ヨーロッパにおける人種の本質
ローカルからグローバルへ―近世人種論議に対する日本の寄与
“ヨーロッパ”の概念形成と人種に対するそのインパクト
人種とヨーロッパ例外主義の問題
まとめそしてプロローグ

訳者あとがき

本書は現生人類を骨格、皮膚、毛髪などの形質的特徴によって分ける「人種」という概念がまだ存在しなかった 14 世紀から 18 世紀前半において、ヨーロッパ人が日本人をどのように捉え、どのような眼差しをもって見ていたのか、その変遷過程を辿る著作である。…文献学的観点から極めて詳細にテキスト分析された重要な著作…また、さまざまな社会的メカニズムを通して、人種の区別がどのように認識されていったのかを、実証的に分析する本書の内容は、歴史研究書という枠組みを越えて、現代の我々が直面する人種観を介在した多くの問題をどのように捉え、立ち向かえば良いのか、その視座を与える…。

日文研総合情報発信室　光平有希博士　日本研究巻 59（2019）